

## 薫物の視点から探る日本の伝統文化

### —『薫集類抄』をめぐる数理文献学的考察—

矢野 環・高橋 美都・福田 智子

#### 1. はじめに

『源氏物語』梅枝巻には、光源氏と六条院の女性たちが薫物を作る場面が描かれる。薫物は、沈香や丁字、白檀など種々の香料を調合して蜜などを加え練り合わせて作成する。所謂練香である。『源氏物語』の時代設定となっている延喜・天曆頃に最も流行したとされ、その代表が「六種の薫物」(梅花・荷葉・侍従・菊花・落葉・黒方)である。だが、そのひとつひとつの調合の仕方にも個人の工夫が見られ、秘法として伝えられるものもあった。つまり、平安時代の貴族にとって、薫物は、その香で個人を特定し、また、人柄をも表す重要なアイテムだったのである。

梅枝巻においても、朝顔齋院の黒方は「心にくくしづやかなる匂ひ」、源氏の侍従は「すぐれてなまめかしうなつかしき香」、紫の上の梅花は「はなやかにいまめかしう、少しはやき心しらひをそへて、めづらしきかをり加はれり」、花散里の荷葉は「さま変はり、しめやかなる香して、あはれになつかし」などと、源氏の弟、蛭兵部卿宮は判じている。

ただし『源氏物語』の世界は、必ずしもその当時の常識的状況とは言えない。『枕草子』で薫物は重要視されるが個別名称は出てこない。成立が先立つ『宇津保物語』においては、種類は黒方が殆どであり最後に侍従も出るが、他の薫物は見当たらず、当然季節との照応もない。沈香は香料と限らず、彫刻の材料ともなり、薫物を飾り物の州浜において粘土細工のように使う場合もあった。沈香を単独で賞玩することは、鎌倉時代末期になって再現し、上級品である「伽羅」の発現も相

まって香道に繋がっていく。薫物は宮中、貴族階級と連歌師等に重要視されて伝承された。

ともかくも、これらの平安時代の薫物(一部は匂袋相当)の製法を集大成した書が、『薫集類抄』である。鳥羽上皇の命を受け、藤原範兼が著したとされる。ある意味では、『源氏物語』の世界を大成したものである。そこには、薫物の調合の仕方ももちろん記されているが、前述のとおり、たとえば「梅花」にも複数の調合法が収められており、また、伝本によっても、調合する香の種類や割合が異なる。

そこで、同志社大学文化情報学部3年生の必修授業「ジョイント・リサーチ」のクラスのひとつとして、このように複雑な本文異同を有する薫物の伝書を、数理文献学的に解析し、現存伝本の系統解析と、その特色を把握することを目指す演習授業を行った。以下はその報告である。

#### 2. 薫物合実習

平安時代の貴族の生活には欠かせないものであった薫物も、現代においては、一部の人々の趣味として継承されているに過ぎないであろう。まして大学生にとっては、西洋の香水や部屋の芳香剤、香りつき柔軟剤には慣れていても、沈香や白檀の香には縁遠いことが少なくない。

そこで、伝書の分析に入る前に、内容をより良く理解するために、薫物を作る実習を行った。薫物を作成することを「合わす」と称する。材料は、香原料を微細末に整えた試料を20種程度まとめたものが市販されており、また、乳鉢や乳棒なども比較的手軽に手に入る。それらを用いて、グルー

プごとに、『薫集類抄』に記されている特定の薫物を分担し、「両」「分」「朱」といった秤量の単位を割合に換算してから、伝書に記される順序通りに香料を調合し、最後に蜂蜜を加え、掌で丸めていく。

調合する前の香原料ひとつひとつの香を確認するのも初めての体験だったという受講生は多い。伝書通り調合するのはきわめて困難だが、出来上がった薫物の香が、香原料の調合の仕方によってかなり違いがあることも実感できたようである。

### 3. 『薫集類抄』 諸本とデータ作成

『薫集類抄』の研究書としては、田中圭子氏『薫集類抄の研究』（三弥井書店、2012年12月）が挙げられる。そこには、①国会図書館本を底本として、②～⑨までの諸本を視野に入れた校本と解説が収められている。以下、具体的な伝本と、末尾に〔国〕等の略号を示す。

- ①国会図書館本（国立国会図書館所蔵）書写年次不明 卷子本 上下二卷〔国〕
- ②鎌倉期古写本（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）鎌倉時代写 冊子本 上巻一冊〔古〕
- ③恩頼堂文庫本（四天王寺国際仏教大学附属図書館恩頼堂文庫所蔵）江戸時代写 冊子本 上下二冊〔恩〕
- ④河村文庫本（名古屋市立鶴舞中央図書館河村文庫所蔵）江戸時代写 冊子本 上下二冊〔鶴〕
- ⑤神宮文庫本（神宮文庫所蔵）江戸時代写 冊子本 上下一冊〔神〕
- ⑥西園寺文庫本（立命館大学附属図書館西園寺文庫所蔵）江戸時代写 冊子本 上下二冊〔西〕
- ⑦岩崎文庫本（関西大学附属図書館岩崎美隆文庫所蔵）江戸時代写 冊子本 上下一冊〔岩〕
- ⑧杏雨書屋江戸期写本（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）江戸時代写 冊子本 上下一冊〔杏〕
- ⑨類従本（群書類従正編所収）安永八（1779）一文政二（1819）年刊 冊子本 上下一冊〔群〕

以上9本の詳しい書誌は同書に譲るが、ここで注意しておきたいのは、②略号「古」の杏雨書屋所蔵鎌倉期古写本が、上巻のみ残存し、下巻の現存がいまだ確認されないという点である。上下巻から成る『薫集類抄』の最古写本が下巻を欠くというのはきわめて残念であり、データ分析の際に留意すべきであろう。

さて、この田中氏の校本を利用して、諸本の本

文異同を数理的に解析するためのデータを作成する。校本では、まず底本〔国〕が次の〔図1〕のように提示される。そして、その頁の本文異同が、〔図2〕のように示される。たとえば、〔図2〕の120頁5行目「薫陸二分」は、〔神〕〔群〕では「薫陸一文」であることを示す。

このようなデータをデジタル化するために、本文異同に基づいて〔図3〕のようなエクセルの表を作成する。

すなわち、本文異同のある箇所について、何種類の異同が生じているのか分類し、底本を1とした時に、2種類目、3種類目、というふうに数値を入力していくのである。実際には異文そのものを記入しておき、エクセルの関数によって自動的に数字にコーディングする。この入力には一つの

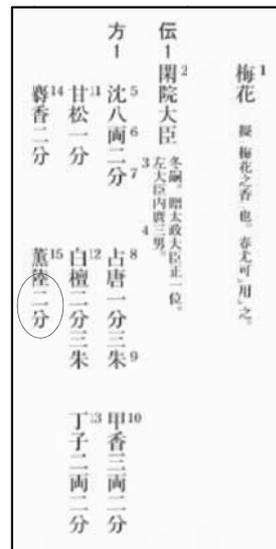


図1. p120 冒頭

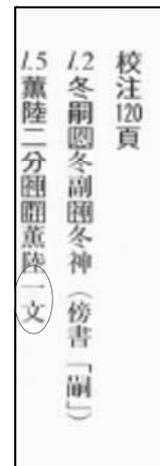


図2. 異同の校注

頁	120	
行	2	5
国	1	1
古	1	1
恩	2	1
鶴	1	1
神	3	2
西	1	1
岩	1	1
杏	1	1
群	1	2
セル番号	1	2

図3. 本文異同のデジタル化



などまったく眼中にない数学の理論が、後に他の分野で重要な役割を果たすという一例である。図5と6より、次の纏まりが見いだせる。

- 1) A:「杏、岩」が一群である。
- 2) B:「国、恩、鶴」も一群をなす。さらに、AもBとほぼ同一の部分から出ている。また、「古」は離れてはいるが、一群としてB':「国、恩、鶴、古」とみてよい。
- 3) C:「神、西、群」は、A、B'とは異なる側にあり、一群と見ることができる。
- 4) D:「古、神」はそれぞれB', Cに属しているが、図5, 6いずれでも十分大きな矩形群で区切られた同じ側に属しており、何らかの共通点があるものと思われる。

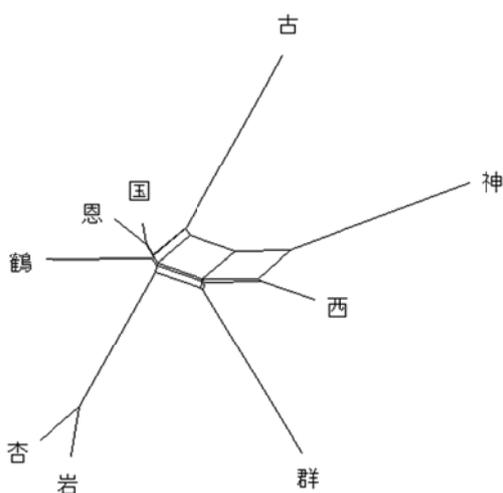


図6. Split Decomposition のネットワーク

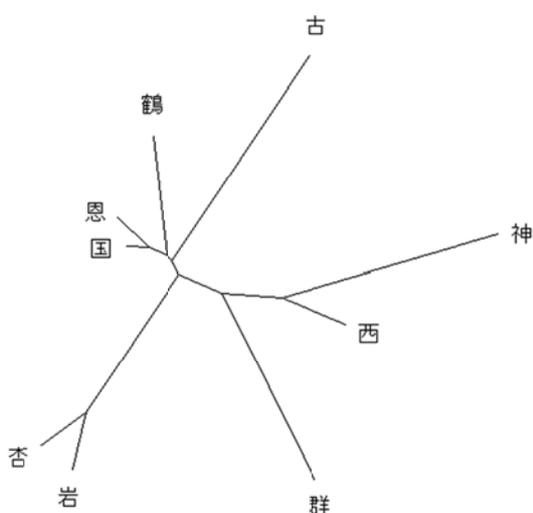


図7. NJ (Neighbor Joining) によるツリー

ここで、A, B', Cを一群と見るのは後のクラスター分析の図9からもわかることである。しかし、このDを一群とみる可能性は、SplitsTreeならではの成果である。即ち、「神:神宮文庫本」に、貴重な「古:鎌倉期古写本」の面影があるということであり、後者の今だ見いだせない下巻相当の内容を推定する可能性も開けたことになる。実際には、原本に戻って地味な作業となるが、それも文化情報学部らしい研究であると言えよう。

なお、図5のNeighborNetは、古典的なNJ即ちNeighbor Joiningを拡張したものである。参考のため、NJのツリーを図7に与える。

## 5. 理解を深める為の内容

このような学生向けの演習においても、扱う伝書やその成立の背景にある文化の正しい理解が深まるよう、常に配慮すべきである。

現在の香道では沈香は雲母の銀葉の上において炷くが、薫物には銀葉を使わない。しかし、平安時代末期には使っていたかもしれない。実際、中国では晩唐の李商隱の詩に見え、日本でも永承五年(1050)『祐子内親王家歌合』に「銀亀を以て薫炉と為す雲母炉に在り」とある。

薫物合においては、用語がしばしば誤解されていることを注意せねばならない。『源氏物語』「梅枝」の冒頭には次のようにある。

正月の晦日なれば、公私のどやかなるころほひに、薫物合はせたまふ。

この語「薫物合」を、歌合・菊合などの左右に分かれて優劣を競う「合わせもの」と解釈することがある。しかしここで言うのは「薫物を調合する」の意味である。また二月十日に蛭兵部卿宮が六条院に参上したとき、前齋院から薫物が届けられたので、他の夫人方の薫物も取り寄せた。源氏と蛭兵部卿宮は次のようにやりとりする。

(源) これ分かせたまへ。誰れにか見せむ  
(蛭) 知る人にもあらずや

「この優劣を判定してください。あなた以外に頼む人はいない」という源氏に対し、「私は『知る人』でもないのですが」と蛭兵部卿宮は謙遜する。これが和歌を背景にしていることを理解させ

るべきである。つまり次の歌を双方承知しているからこそできた会話である。

「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」(古今集春上、三八、紀友則)

そして、その後依頼されたように蛭兵部卿は判者として薫物の評価を行うが、それは左右に別けないとしても対抗させるわけではなく、単に正確な批評をしているに過ぎない。また本文にも「合せもの」としての「薫物合」という語は出てこない。つまり、梅枝巻の薫物批評を、歌合の類似としての「薫物合」と解すべきではない。後世の香合の一つとしての薫物合が投影されて誤解されてきたという事情を理解させるべきであろう。

また、実際の薫物調合の実習においては、『後伏見院宸翰薫物方』『むくさのたね』『三条家薫物書』(『薫集類抄』と同じく、正統群書類従所収)など他の薫物の伝書によって、『源氏物語』によって形成され『薫集類抄』によって確立した「六種の薫物」という枠組み(菊花は実態に乏しい)が、室町時代に引き継がれたことを理解させる。また、香の粉末の調合を大きな紙で区分した区画ごとに混ぜ合わせるという、本格的な手続きもそれらの伝書にある図に基づいて行われた。

解析の部分についても、同じデータを用いて他の手法を行った場合の結果と比較させる必要がある。つまり、距離を基にした標準的な多変量解析としての「クラスター分析」「MDS」などである。

SplitsTree で処理したファイルには、Distance block があり、距離行列が入っている。その部分を Excel に移せば先の通りである(図8)。これを基にして、他の処理を行うことができる。

クラスター分析は、系統ネットワークを簡略化したような結果であり、高さ0.5で切れば系統による3分類が再現されるものの、細かい関係が明らかでない(図9)。MDSの散布図は相互の遠近はわかるものの、クラスター分析以上に写本相互の関係が明らかでない(図10)。いずれの結果も、系統分析のネットワークの情報量には及ばない。

## 6. おわりに

以上、田中圭子氏『薫集類抄の研究』所収の校本をもとに、本文異同の情報をデータ化し、SprintsTree による分析を行った。地道な作業が多

国	古	思	鶴	神	西	岩	杏	群	
国	0	0.296	0.069	0.166	0.428	0.247	0.315	0.308	0.338
古	0.296	0	0.326	0.396	0.528	0.449	0.507	0.524	0.559
思	0.069	0.326	0	0.194	0.438	0.275	0.325	0.33	0.35
鶴	0.166	0.396	0.194	0	0.517	0.34	0.361	0.358	0.412
神	0.428	0.528	0.438	0.517	0	0.303	0.602	0.599	0.523
西	0.247	0.449	0.275	0.34	0.303	0	0.435	0.419	0.333
岩	0.315	0.507	0.325	0.361	0.602	0.435	0	0.118	0.482
杏	0.308	0.524	0.33	0.358	0.599	0.419	0.118	0	0.469
群	0.338	0.559	0.35	0.412	0.523	0.333	0.482	0.469	0

図8. 九写本相互の距離行列

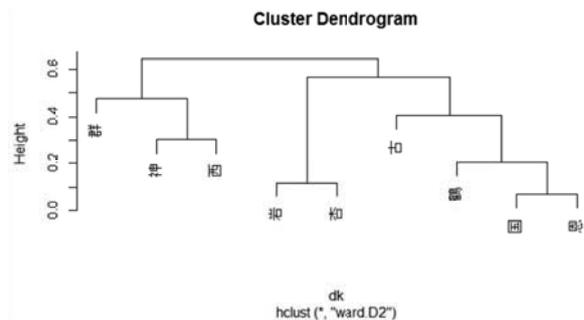


図9. クラスター分析

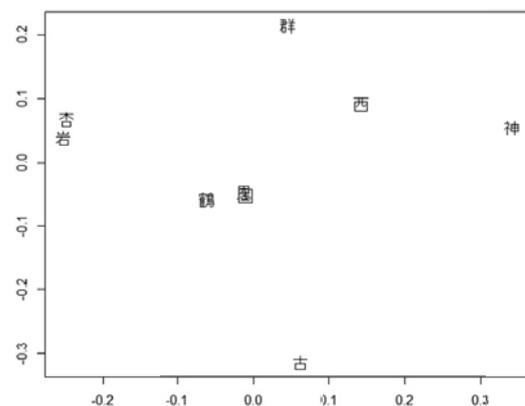


図10. MDSの散布図(国と思は重なっている)

かったが、受講生は真摯に取り組み、一定の成果を出せたように思う。「演習のための演習」ではなかったことは、受講生も強く感じたであろう。

しかし、今後の課題も少なくない。本授業では、田中氏の校本に拠って本文異同を把握したが、それは田中氏の目を通したデータ整理の結果を利用したに過ぎない。原本を実際に閲覧した時に見えてくるものも自ずとあるのではないか。

本授業の後、引き続き卒業研究で、SprintsTree を用いた分析を行った受講生がいる。さまざまな場面で、この分析手法を駆使し、文化の本質に迫る授業・研究がなされることを望む。